編集ノート

文学者は偏屈者である。というのは態度としての妥協とごまかしをいとうという意味である。守るべきものを守ることにおいて極度にかたくななのが文学者である。だから文学者はもともと保守的であるといわれていい。それを昔の人は「みさを」といった。守るべきものを身をもって守り通す保守の態度の持続をいう。厳しい拒絶の姿勢をとりつつ包摂的であり、かたくなな保守の態度を持しつつ進歩的であるのが、文学者の身上である。包摂的であり進歩的であるのは、人間性の自由なる飛翔を希う点においていわれるのであるが、文学精神というものも、畢竟はこの拒絶と包摂と、それから保守と進歩との自己矛盾の火花をさすのであろう。それゆえに文学精神は孤高の精神である。この孤高の悲しみを知らない者は文学者でもなく、また文学研究者ともいえない。

滔々たる時流を観望し、新しき年を光ある年たらしめるため、文学の事にたずさわる者として、覚悟を新たにしたいと思うのである。

（昭和二十三年十二月）